小論文　　広島大学　総合科学部　総合科学科（文科系）　前期日程

＜総括＞

試験時間　１５０分	総解答字数　１２００ 字

・「人間と心」に関する資料を読んで、自由なテーマで小論文を作成することが求められた。全体を通底するのは「二元論的ものの見方の相対化」であり、個別に成立させやすいテーマとしては、人間と人間以外を分かつものは何か（人間観）、意味生成の場としての身体・空間（身体論）、ものの見方・区分け方、言語や文化により分節化された認識世界（言語論・文化論・認知論・発達心理学）が挙げられる。
・いずれも、受験生にとってなじみ深い主題であるが、理解に知見を要する資料が多く、全体的に読解の難度が著しく高かった。資料 3 つを組み合わせることは問題なく可能な資料群であったが、受験生にとっては至難の業であった可能性がある。趣旨や主旨を掴みづらい文章であっても資料に振り回されることなく、粘り強く格闘できたかどうかが、成否を分けただろう。
・難しさはさておき、多様な問題関心に即して書かれた資料を組み合わせて問題を発見し、身近な課題と関連づけつつ、論ずるに値する一貫した主題を設定し、論文を作成する力が求められているという点は、全く例年通りである。また、現在進みつつある教育改革の要求に沿っている。大学で研究し、あるいは社会に出て取り組む現実の課題は難しく複雑だ。難しいことの難しさに翻弄されることなく、それを自らの力で探究できるまでに解きほぐす力が、今まで以上に求められる試験であった。
・久々に、設問上でキーワードが与えられるタイプの出題であった。ただし与えられたのは資料が何を対象としているかについてであって、受験生が設定する論述主題はキーワードにとらわれなくても良いことが、当日設問訂正を入れてまで明示された。難度が高い資料を前に、議論の自由度を担保しようとする大学側の配慮であったと考えられる一方で、資料を些末に（語句レベルで）つなげるだけの答案を避けてほしい（それが多い）という大学の苦慮も伺える。受験生は心にとどめるべきだ。

＜課題文の分析＞

大問番号	一
内　　容 （主題）	二元論的ものの見方の相対化
出　　典 （作者）	【資料一】河野哲也著『＜心＞はからだの外にある―「エコロジカルな私」の哲学』 日本放送出版協会、2006 年（2,117 字） 【資料二】ダナ・ハラウェイ著、高橋さきの訳『猿と女とサイボーグ―自然の再発明』 青土社、2000 年（2,247 字） 【資料三】ベンジャミン・リベット著、下條信輔・安納令奈訳 『マインド・タイム―脳と意識の時間』岩波書店、2021 年（2,376 字） 【資料四】磯野真穂著『なぜふつうに食べられないのか―拒食と過食の文化人類学』春秋社、 2015 年（2,501 字） 【資料五】鎌田茂雄著『維摩経講話』月刊ペン社、1982 年（2,200 字）
長短・ 難易等 前年比較	資料総字数　約 11,441 字 長短（短い・やや短い・変化なし・やや長い・長い） 難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

＜大問分析＞

大問	出題形式	ﾃｰﾏ･課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント（設問内容・論述ポイントなど）
一	課題文	学部系統的	一	論述	1,200 字	５つの資料から３つ以上を選択し、その内容を踏まえて小論文を作成し、適切な題をつける。

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」
※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」
※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

© 河合塾　2024 年

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

・以前から、複雑で多様な問題から課題を取り出し、分析・推論を行いながら一貫した論文を作成するという出題であった。しかし、課題の複雑さが一段と増した印象がある。新課程入試に向けて、志望者は今年度レベルを視座に練習することをすすめる。
・様々なテーマについての意見を、あらかじめ固定的に準備しておくことは、有効な対策ではない。複数資料を関連づけて主題を設定し、意見を述べる練習を繰り返してほしい。
・解答例は正解ではない。各解答例は、テーマ、難度にかかわらず通用する思考法の典型 4 つである。どのような思考法をとれば安定して答案を作成できるのかという点を指導者の下で習得すべきだ。

© 河合塾　2024 年